

境界に立つ女ゴーレム

ー アヒム・フォン・アルニム『エジプトのイザベラ』にみる ジェンダーについて ー

中岡翔子

はじめに

ユダヤ教のゴーレム伝説から材を取った物語『エジプトのイザベラ——皇帝カール五世、若き日の初恋』（1812）の中で、アヒム・フォン・アルニム（1781-1831）は女性のゴーレム（人造人間）を描き出した。¹ アルニムがゴーレムに女性の姿をまとうせたことに、私たちは注意を向けなければならない。なぜなら女性のゴーレムは、伝説においては基本的に登場しないからである。そもそもゴーレムの製造とは神によるアダムの創造の再現であり、それゆえゴーレムは男性の形を模して作られてきた。² それでは、女性の形を模して作られたゴーレムは、いかなる点で男性のゴーレムと異なるのか。本稿ではこの疑問に答えるために、アルニムが女ゴーレムに割り当てた役割とその作用をテキストから分析していく。

伝説のゴーレムと『エジプトのイザベラ』のゴーレムとを比較するさい争点となるのは、製造者を破滅へと導くゴーレムの性質である。アルニムが下敷きにしたゴーレム伝説については、本稿を展開するうえでしばしば立ち返ることになるのでここでそのあらましをみておくこととする。1808年にヤーコプ・グリム（1785-1863）は、東欧のユダヤ人たちの間で語り継がれてきたゴーレム伝説をドイツの教養市民層に紹介した。それ以降ゴーレム伝説はユダヤ人ではない作家らによって積極的に文学作品に取り入れられるようになる。その先陣を切ったのがアルニムであった。そこでまずグリムによって紹介されたゴーレム伝説の全貌を確認したい。

ポーランドのユダヤ人たちは、ある種の祈禱を唱え、断食を行った後で、粘土あるいは膠で人型を作る。そして、この人形に向かって奇蹟をもたらすシエム・ハム・フォラスを語りか

アルニムの『エジプトのイザベラ』のテキストは以下のものを使用し、引用は括弧内に頁数のみを記す。Arim, Ludwig Achim von: Isabella von Ägypten, Kaiser Karl des Fünften erste Jugendliebe. In: Ders.: *Sämtliche Romane und Erzählungen*. Bd. 2. Hrsg. von Walther Migge. München 2002, S. 452-557.

¹ ドイツ語において「ゴーレム」という単語は男性名詞であるが、アルニムは„die Golem“と綴ることで、男のゴーレムと女のゴーレムとを使い分けている。

² Vgl. Scholem, Gershom: *Zur Kabbala und ihrer Symbolik*. Frankfurt a. M. 2013 [1973], S. 211.

けると、人形は生命を獲得するだろう。その人形は語ることはできないが、話されたことや命令されたことはかなりの程度理解する。彼らはこの人形をゴーレムと呼び、あらゆる家事労働を行う一人の召使として用いたが、ゴーレムは家の外に出ることを禁止されていた。ところで、ゴーレムの額には「真理／神」(aemaeth)と書かれており、彼は毎日に体重を増した。そしてすぐに家の者たちよりも大きく、強くなった。最初はあんなに小さかったのだが。ゴーレムに恐れをなした人びとが、最初の一文字を消し、「彼は死んだ」(maeth)とすると、彼は崩れてもとの粘土に戻る。

しかしあるときひとりのユダヤ人がゴーレムを成長するままにしておいたので、その額に手が届かなくなってしまった。恐ろしくなった男は彼の長靴を脱がせるよう召使に命じた。男はしゃがんだ隙にゴーレムの額の文字を消すつもりだったのだ。事は思惑通りに運び、最初の一文字を消すことに成功した。しかし、粘土の塊がそのユダヤ人の上に崩れ落ちて、彼を完全に押しつぶしてしまった。³

ここで重要なことは、ゴーレムは意図的に製造者を破滅させるのではないという点である。ゴーレムが人間にとって脅威となるのは、製造者の不注意が原因と考えられるのだ。つまり製造者はゴーレムをコントロールできなくなっているのである。

このようなゴーレムの制御不能性のモチーフは、伝説の中では比較的新しいヴァリエーションであるが、⁴ 当時のキリスト教社会においても広く受け入れられ、20 世紀前半にブラハで成立したゴーレム伝説にも受け継がれていく重要なモチーフである。⁵ アルニムもまた、ゴーレムが製造者を打ち倒した話を、グリムが紹介した伝説のままの形で『エジプトのイザベラ』に取り入れている(508)。女ゴーレムを製造したユダヤ人は、ゴーレムを製造するとさまざまな不幸が起こるのだと警告し、その例としてグリムの伝説のヴァリエーションを引合いに出している。

アルニムの同時代人で『隠者のための新聞』の共同編集者であるクレメンス・ブレンターノ(1778-1842)は、このゴーレム伝説のヴァリエーションを次のように解釈している。

³ Grimm, Jacob: Entstehung der Verlagspoeseie. In: *Zeitung für Einsiedler* 7 (23. April 1808), S. 56. ヤーコブは、ゴーレム伝説に「出版社詩」という表題をつけて『隠者のための新聞』に再録した。初出の表題は「ゴーレム伝説」である。ここに掲載した再録の版と初出の版とで、内容に異同はない。

⁴ ショーレムによれば、ゴーレムが周囲の世界に危害を加えるという要素は 17 世紀のポーランドで初めて確認されたものである。Vgl. Scholem, a. a. O., S. 254f.

⁵ ゴーレムの制御不能性のモチーフは現代にも受け継がれ、ゴーレムを解釈するうえでさらなる発展の契機となっている。「ゴーレムは単に、人間が世界のコントロールを失い、機械がそれにとって代わっていることを示す寓話にとどまらない。それは戦争と暴力にまつわる不可避の盲目性についての寓話でもあるのだ。」参照、アントニオ・ネグリ／マイケル・ハート『マルチチュード(上) <帝国>時代の戦争と民主主義』(幾島幸子 訳) 日本放送出版協会 2005 年、41、42 頁。

うわべだけの模造品はすべて、しまいには自らの主人を打ち倒すのだ。我々はいつの時代もこのことについての例を数えきれないほど持っている。真の芸術作品のみが、つまり神の手による被造物のみが永遠である。ただ一人主のみがその作品よりはるかに大きく、自らの似姿に倣って創った人間の額に書いた「真理」にいつも手が届くのである。⁶

ここでもまたグリムが紹介した伝説と同様に、ゴーレムに打ち倒される原因は人間の側に帰されている。ただブレンターノの場合は、神と人間の身体的な大きさに焦点が当てられている。神は人間よりも圧倒的に大きいために、人間が神を押しつぶすことはできないのである。しかし人間対ゴーレムの場合はそうはいかない。ゴーレムはあつという間に製造者よりも大きくなってしまふ。このことは人間が身体的な限界に縛られていることを明らかにする。それでは、身体面でゴーレムが製造者にとって脅威となりうる状況とはいかなるものか。ここで再びゴーレムの性別に留意したい。それというのも伝説にみられたゴーレムの肉体的な特徴（体重の増加、身長が増長、とりわけ力の増強）は、ゴーレムが男性であることを前提としているからである。

これに対して『エジプトのイザベラ』において女ゴーレムは大きくなることも力強くなることもない。アルニムによるゴーレムは、伝説と同じゴーレムであっても一見すると女性なのである。後に詳しくみていくが、ゴーレムの性別の転換は、ゴーレム素材について回る危険の様相にも変化を及ぼすのである。

この作品に関するこれまでの研究は、ゴーレムの性別の転換に疑問を投げかけてこなかった。ドイツ文学におけるゴーレム伝説の利用をいち早く研究したベアテ・ローゼンフェルトは、『エジプトのイザベラ』に登場するゴーレムを女主人公イザベラのドッペルゲンガーとみなしている。⁷ またアルニム研究の主流をなしている詩論的観点からの作品解釈においても、ゴーレムはイザベラの複製であるという前提でしばしば論が展開されている。⁸ たしかに女ゴーレムの外見はイザベラの「似姿 (das Ebenbild)」(507) そのものである。それゆえこの物語におい

⁶ Brentano, Clemens: Erklärung der sogenannten Golem in der Rabbinischen Kabbala. [1814] In: Ders.: *Werke*. Bd. 2. Hrsg. v. Wolfgang Frühwald u. Friedhelm Kemp. München 1963, S. 1122f.

⁷ Vgl. Rosenfeld, Beate: *Die Golemsage und ihre Verwertung in der deutschen Literatur*. Breslau 1934, S. 49.

⁸ 以下に挙げる先行研究は、ゴーレムとイザベラとの「鏡像」関係を、ロマン主義の「ゆがんだ鏡」の表象として解釈している。Vgl. Rezai-Dubiel, Jasmin Marjam: Die Dekonstruktion des romantischen Geniekonzepts in Achim von Arnims *Isabella von Ägypten*. In: *Revista de Filologia Alemana* 22 (2014), S. 73-92, hier S. 84; Kilcher, Andreas B.: *Die Sprachtheorie der Kabbala als ästhetisches Paradigma: die Konstruktion einer ästhetischen Kabbala seit der frühen Neuzeit*. Stuttgart 1998, S. 307-317, hier S. 311; Bonfiglio, Thomas P.: A Tropical View of Irony and Satire in Arnim's *Isabella von Ägypten*. In: *Colloquia germanica* 18 (1985), S. 221-228, hier S. 223. ローゼンフェルトやレザイ＝ドゥビエル、そしてキルヒャーの研究では、アルニムの「ゴーレム」を論じるさい一貫して男性名詞 „der Golem“ が用いられている。またボンフィリオの英語論文では、女ゴーレムの女性性についての言及はない。

てゴーレムが女性であることは一見すると当然のこのように思われる。しかし、単にイザベラの複製であるならばゴーレムではなく人形を用いれば事足りるはずである。

ゴーレムは科学の産物ではないという点で人形とは明確に区別されなければならない。むしろゴーレムは宗教的な想像力の産物である。ハインリヒ・ハイネ (1797-1856) は、その著書『ロマン派』(1836) においてアルニムによる女ゴーレムを「幽霊」⁹ と呼び、フランス人に向かって次のように忠告している。

狂気や幻覚や霊界の恐ろしいものはすべて、私たちドイツ人に任せたまえ。ドイツこそ、魔法使いの老婆や死んだ熊皮男や、男や女のゴーレム、そしてとりわけ小さなコルネリウス・ネーボスのような元帥にとって、もっとも都合な国なのだ。¹⁰

ここでハイネが言及している「魔法使いの老婆」「熊皮男」「コルネリウス・ネーボス」とはそれぞれゴーレムと同様『エジプトのイザベラ』に登場する不思議な人物たちである。こうした登場人物たちは、「狂気」や「幻覚」、「霊界」とあるように、科学的というよりは、迷信に満ちた不合理な存在である。彼らは民間信仰の領域に属しており、それぞれ自然崇拝と結びついている。ただしゴーレムの超自然的な出生は、自然崇拝ではなく、先に触れたように神によるアダムの創造に負っている。ゴーレムの製造は人間離れした技である。それは、本来ならば人間には認識することも把握することも不可能な神の技を手本としている。このようにゴーレムという存在を定義するさいにはつねにアダムに立ち戻らねばならない。

人類最初の女(イヴ)はアダムが土から創られたのとは異なり、アダムの肋骨から創られた。ここから類推して、イヴはアダムが神によって創られたときすでにアダムに内包されていたと考えられる。それならば、アダム創造の再現であるゴーレムにも、女へと分化する可能性が内包されているとはいえないだろうか。本稿の結論を先取りしていえば、女ゴーレムは、男女という二項対立のどちらかに振り分けられる存在ではなく、ジェンダー間の境界に立つ存在なのである。そして、境界に立つことによって女ゴーレムは、社会的に形成された男女という区別がいかに曖昧であるかを暴露する。ここではこうしたジェンダー観を形作っているのは西洋の白人男性を中心とした家父長的な秩序である。女ゴーレムはこれを攪乱する存在なのである。¹¹

⁹ Heine, Heinrich: Die Romantische Schule. In: Ders.: *Werke*. Bd. 2. Hrsg. von Stuart Atkins, München 1973, S. 231.

¹⁰ Ebd., S. 233.

¹¹ 本稿では女ゴーレムのジェンダーに関して、ダナ・ハラウェイの「サイボーグ宣言」を参考にしていく。ダナ・ハラウェイ『サイボーグ・フェミニズム』(巖谷之／小谷真理 編) トレヴィル 1991 年。ハラウェイによれば「女性の経験」ほどサイボーグ的なものはない。ここでいうサイボーグとは、「架空の生物であるとともに、現実社会の産物でもある」。ハラウェイは、女性であるという状態自体が本来存在していないと説明する。これが「架空の生物」としての女性である。同時に、女性であること

このことを明らかにするために、第一章では女ゴーレムをめぐる語りにも焦点を当てて、語り手を前景化する。するとここから白人男性を中心とした言説が明らかとなる。そして第二章では、語り手の父権的な偏見を手掛かりにこの物語における女性とは何か、男性とは何かを考察する。そして第三章では、第二章で明らかになった男女の規範と女ゴーレムとを比較することで、女ゴーレムが白人男性を中心とした父権的なジェンダー観に収めることのできない存在であることを明らかにする。

1. 女ゴーレムをめぐる語りの分析

第一章の目的はこの物語の語り手を前景化することにあるが、その前にまず物語の大枠を概観したい。物語の舞台となるのは1516年から1517年頃のベルギーの都市ヘントである。ジブシーの少女イザベラはヘントから程遠くないスヘルデ河のほとりのあばら家に父と暮らしていた。物語の冒頭、そのあばら家にイザベラが一人でいるときに、ジブシーの老婆ブラーカが訪ねてきて、イザベラの父が死んだことを知らせる。イザベラの父は、ジブシーの偉大な統率者であったが、無実の罪を着せられて、絞首刑に処せられたのだ。天涯孤独の身となったイザベラは、偉大な統率者であった父に代わり、放浪の民である一族を故郷エジプトに連れて帰るという希望を託されることになる。父の死後、イザベラはさまざまな出来事に巻き込まれつつも自らの使命を遂行するために行動を起こし、最後には一族を率いてエジプトへの帰還を果たす。この物語の本筋は、イザベラが世間知らずの少女から、民族の主導者へと成長するまでにある。

その他の登場人物たちは、良きにつけ悪きにつけイザベラとの関係において語られる。この物語の副題に「皇帝カール五世、若き日の初恋」とあるように、イザベラの内面的な成長は皇帝カール五世との恋物語に負うところが大きい。イザベラとカールは互いに惹かれ合いながらも、身分や立場の違いからすれ違い、互いに思いを伝えられないでいる。とりわけイザベラは、ジブシーという出自のために財産を持ち合わせておらず、カールの住むヘントに行くために金を工面しなければならない。しかし、働いた経験も知識もないイザベラは、父が遺した魔術書に頼るしかない。イザベラはそこでアルラウンという人間の形をした植物の根の情報をみつけ、これを掘り起こす。アルラウンは財宝を見つける能力を持っているのである。このようにして物語は、イザベラを中心に現実と幻想が混ざり合いながら進展していく。

もちろん女ゴーレムは幻想の領域に属している。女ゴーレムはカールの命令によって作られ

は父権制などの社会的現実を経験していくうちに呑みこまされる制度である。こうした「女性の経験」は、政治的に作られたものであり、「現実社会の産物」である。つまり、サイボーグは男女の性差を前提とした生殖＝再生産のモデルを虚偽として暴き出す、「脱性差時代の世界の産物」である。このようなサイボーグは、男性中心主義の伝統が孕む階層的二項対立に還元することのできない存在であるといえる。

た。それというのも、アルラウンがイザベラを自分の妻にしようと企てたためである。イザベラはカールのことを愛しているのだが、気立ての優しさからアルラウンに逆らうことができない。そこでカールは、アルラウンを騙すためにイザベラに似せてゴーレムを作らせたのである。アルラウンは、イザベラと女ゴーレムとが取り替えられたことに気づかずに、女ゴーレムと結婚する。しかし、実際のところアルラウンは自らの意思で女ゴーレムを選びとっている。アルラウンは、イザベラが女ゴーレムと対面したとき、本物のイザベラを見分けられないばかりか女ゴーレムに味方し、さらには女ゴーレムが土くれに戻されその正体が明らかになった後も、女ゴーレムの土くれを集めて元の形に戻そうとするのである。そしてカールもまた、自ら作らせておきながら、途中から女ゴーレムとイザベラとを取り違えてしまい、女ゴーレムの虜になっていく。

では女ゴーレムの何がカールとアルラウンを魅了しているのかといえば、飾り立てた外見の美しさと、官能的な性質である。アルラウンがイザベラを追い払った理由はまさにここにあり、「どさ回りの女楽士の古いぼろを着たイザベラよりも、着飾ったゴーレムのほうが気に入った」(520) ためなのだ。イザベラの姿形をした女ゴーレムは、伝説で語られているような愚鈍だが忠実な僕としてのゴーレムではない。女ゴーレムはカールを「常習的な官能」(535) の虜にする。このように、女ゴーレムは一見したところ男性の気に入る女性らしさの要求に応えているようである。

しかし、この作品の語り手は、女ゴーレムに関して物語の登場人物たちが知らない事実を語っている。そこでまずこの物語全体の語り手を焦点化する必要がある。実のところ、この作品の語り手は、それぞれの登場人物の感情や発音ないしは行いの動機を説明するだけでなく、自身の体験談を直接語法を用いて物語の合間に織り込むなどして、物語の解釈に積極的に関与しようとしている(521)。それは本筋の物語をまとめ上げるさいにもみられ、語り手は物語に意味を与える役目を担っているのである。とりわけ注目すべきは作品の終盤に挿入された脚注である。これが唯一この作品に挿入された脚注であるのだが、そこで語り手は突然、次のように呼びかけている。

あなたがた、芸術に多言を弄する人びとよ、我々に特有の本性のあらゆる思慮深い衝動の中に、ギリシャの教養のむなしく永遠に繰り返す反響でもって叫びを込めるあなたがたに、語り手である私はここで言わねばならない！ あなたがたは自分たちがアルラウンの労作よりはるかに優れていると思い込んでいるが、誓って申し上げよう、古き神々の像の前に佇むときのあなたがたの空虚な目、使い古された幾千の言葉で古き神々の像について意見を述べるあなたがたの空虚な心、それらが古代の素晴らしい作品の中にみるものは、哀れな小男〔アルラウン〕がその未完成の土くれ〔ゴーレム〕の中にみるものよりはるかに少

ないのだ。なぜなら、土くれは彼の手で固められ、彼は相変わらず成し遂げるべく、さらに突き進んでいくであろうから。しかし、あなたがたが神々に与えたものはなにひとつとしてなく、神々があなたがたに与えたものもなかった。人工的に生命を与えられたゴーレムという神々の像はあなたがたのものだ。私はあなたがたの言葉を消す。いや、そもそも言葉なんてあなたがたにはなかったのだ。あなたがたはこのことを否定しはしないだろう。立ち上がりなさい。そして笑ったりせずに、神像と呼ぶにふさわしい何か自分自身のものを作りなさい。けれどもあなたがたの手は常に行いに乏しく、あなたがたの口は言葉で満たされている。(544)

語り手は、古代ギリシャの芸術作品に「多言を弄する」だけで何も作ろうとしない人びとを非難しているが、実際のところ女ゴーレムが先にもみたようにあまり道徳的な性質を持ち合わせていないことに鑑みるならば、ここで「自分自身のものを作りなさい」という忠告は、非常に辛辣な皮肉だといえる。とはいえ、ここで注目したいのはこの引用の意味ではなく形式である。語り手が「読者たち」ではなく「あなたがた」と呼びかけていることに目を向けたい。この作品の語り手は、物語を不特定多数の読者に提示するのではなく、目の前にいる人びと（聞き手）に今まさに語っているのである。もちろん目の前という聞き手の位置から、語り手が聞き手と同時代人であることは言うまでもない。語り手はさらに聞き手を限定して、「我らが母語ドイツ語」(555)と述べる。こうした一人称複数、別の箇所では「我々大酒飲みにとって」(536)とあり、聞き手に親近感を持たせるために用いられている。

このように同時代のドイツ人にとっては身近な存在である語り手は、カールの命を受けてユダヤ人が製造した女ゴーレムに対して偏見を抱いている。語り手は、聞き手に対して幾度も女ゴーレムの性質が製造者であるユダヤ人から受け継いだものであることを念押しする。その性質とは、「高慢、肉欲、吝嗇」(509)である。しかし、いったい私たちはこの偏見に満ちた語り手を信用していいのだろうか。なぜなら、語り手がユダヤ人に特有と言ったその性質をアルラウンもカールも備えているのだから。アルラウンは金に汚く、カールは好色である。第一、女ゴーレムを製造したユダヤ人は、そのような悪徳がゴーレムに受け継がれるなどとは実際のところ言っていない。ゴーレム製造に関して素人である語り手よりも、製造者本人の言葉を信じるほうが妥当であろう。そこでユダヤ人の語りにも目を向けたい。カールの質問を受けて、ユダヤ人はゴーレム製造の秘密を次のように明かす。

主なる神はなぜ他のすべてのものができあがってから人間を創ったのでしょうか。それは明らかに、神が人間の本性について考え始めたときすでに、人間の本性のうちにその他のものが含まれていたからなのです。人間の本性のうちに他のものがあるということは、つ

まり人間の本性のうちにはまだそれが残っているということでもあります。神の似姿である人間は、神が創造のさいに用いた正しい言葉を知っているならば、似たようなものを作り出すことができるのです。まだ楽園があったころなら、我々はそのにある土くれと同じだけたくさん人間をこしらえることができたでしょう。しかし我々は楽園を追い出されてしまったので、我々の人間の良し悪しは、この大地の粘土がどれほど楽園の粘土と関係があるかで決まるのです。(509)

要するに、人間の本性には神に匹敵する創造力が備わっているのである。しかし、もし人間が「正しい言葉」を知っていたとしても、この大地の土が楽園の土と同じでないかぎり、人間には「似たようなもの」しか作ることができない。ここから分かることは、女ゴーレムの性質が原料となる土の質に左右されており、ユダヤ人の性質に由来しているのではないということである。もう一つここで重要な点は、創造の力はユダヤ人だけではなく人間一般に備わっているということである。ユダヤ人によるこうした証言から、この作品の語り手が全知であっても知っていることを全て正しく語っているとは限らないということが明らかとなる。

以上のことから、この作品の語り手が、偏見と誤認とからなる自らの解釈を強引に物語に導入しているといえる。とはいえ、この語り手が物語を伝える唯一の媒介者である以上、私たちはこの人物に頼らざるをえない。しかも「高慢、肉欲、吝嗇」という女ゴーレムの性質が土という無機質な物質に還元されてしまった今こそ、語り手がこの物語に持ち込んだ社会的性差という偏見が判断の基準として必要なのである。

2. 父権制社会のジェンダー（生殖／自然、性的搾取／文化）

ここまで、語り手がドイツ人であり反ユダヤ的傾向を持っていることを明らかにした。第二章では、こうした語り手の偏見を手掛かりにこの物語における男女の規範とはいかなるものかを明確にしていく。そのさい、女性性の代弁者としてイザベラを、男性性の代弁者としてカールを取り上げる。この物語においてイザベラに代弁される女性性は、自然であることと生殖行為に基づいており、カールに代弁される男性性は、文化と性的搾取との図式を形作っている。

まずこうした男女の役割分担が、カールと語り手という男性の側の父権的な価値体系のもとに成立していることを明らかにしておこう。カールは、イザベラの正式な夫であることを主張するアルラウンに向かって「夫はあなたの主であるべきです。(der Mann soll dein Herr sein)」(545)と聖書の一節を引用する。カールがこの一節を引合いに出したのは、アルラウンではなく自分こそイザベラの夫に相応しい男であることを示すためである。しかしこの一節には含みがある。これは創世記第3章16節において神が女（イヴ）に向かって言った言葉である。この第3章は、イヴがヘビに唆されて禁断の果実を口にするとくだりである。それゆえ同じ16節で神

は、イヴに子を産む苦しみを与え、それでもなお夫を主として慕うようにと告げるのである。つまり、この一節は単にアルラウンに向けて言われたのではなく、イザベラにも向けられているのである。このようにして、カールはイザベラに対して父権的な位置にあることを示している。

また語り手もカールと同様、イザベラに対して上位に立とうとする。それが明らかとなるのは、語り手が「我々はイザベラを罪のない存在としてでっち上げたのだ」(555)と解説を加えたときである。ここで思い出してほしいことは、女ゴーレムを作るよう命じたのがカールであったということである。カールが女ゴーレムを作ったように、語り手はイザベラを作ったのである。さらに女ゴーレムはイザベラのことを「神によって先に創られたあなた」(535)と呼んでいる。つまりこの語り手はイザベラに対して神のような存在でもある。

こうしたカールと語り手との父権的な価値観に従って、生殖(女性)と性的搾取(男性)との二項対立をイザベラとカールとの違いからみていきたい。語り手は、イザベラが母性的な愛と精神的な愛を持つように仕向けている。このことはアルラウンを得るために必要な条件を一見しても明らかである。アルラウンを地中から掘り起こすことができるのは、「女性であることの快楽を求めず、愛する人のそばにただ満足し、全霊をかけて愛するような処女」(464)だけである。そしてイザベラがアルラウンを掘り起こしたあと何をしたかということ、アルラウンの頭に「黍」を撒いて髪とし、顔と思しき部分に「杜松の核」で目を、「野ばらの実」で口をはめ込んだ(469)。つまり彼女は、「小さな子供のような(wie ein kleines Kind)」(471)ものを作ったのである。

彼女が出来損ないの人間〔アルラウン〕に向けた尋常ではない愛情は、なんと我々を驚かせることか。それも彼女が君主の美しい息子〔カール〕に唯一の愛情を示したあとだったのだからなおさらである。我々が作り出したものすべてに愛着を感じるのが、最も神聖な行いなのだ。そしてこのことは、我々が世間の人びとと自らの醜さに驚く一方で、我々の心のうちに聖書の言葉を呼び起こす。すなわち神は自らが作り出したこの世の人びとを愛した。それゆえ神は我々にひとり子キリストを遣わしたのである。(471)

ここでは「出来損ないの人間」であるアルラウンが「世間の人びと」に置き換えられることで人間の醜さが抑えられ、神の愛はその醜い人間の上にも平等に降り注ぐということが表明されている。そして神が人間に向ける愛はイザベラがアルラウンに向ける愛と比べられている。

しかし人間の愛は神の愛と等しく無償のものだろうか。イザベラはアルラウンに腹を立てたり、掘り起こしたことを後悔したりする。つまり、イザベラがアルラウンに示す愛が神の愛に匹敵すると解釈するのはキリスト教徒であると目される語り手自身である。ここで語り手が行

った読み換えの手続きは、先ほどと同様に解説部分でも行われている。

あなた【イザベラ】の愛は撥ねつけられても消え去らなかつた。もう一人【ゴーレム】は愛を理解することも、その価値を認めることもせず、愛が一族となること、あなたに愛されて一族が自由になることを知るよしもなかつた。(556)

ここでもまた、「撥ねつけられても」なお愛するような女性を評価しているのは語り手である。なぜ女性が、離れていく恋人に執着することなく自らの幸福を追求してはいけないのかという疑問も抱かないまま、語り手は女ゴーレムに非難の矛先を向けるのである。こうした語り手の女性観は、女性を男性の下に置いて抑圧しようとする西欧の父権的な原理に立脚している。

とはいえ父権制が成立するためには、女性の側にも共犯者が必要である。この物語でその役を果たすのはブラーカである。ブラーカはイザベラに民族の運命を託すべく使命を言い渡す。

おまえはこの世界の半分を将来継ぐことになる人の子を産まなければならないのだよ。その子は、権力のある父の愛情をえて、ヨーロッパ中に散っているおまえの民族の生き残りを集め、我らがエジプトの居住地に連れ戻すのだ。(493)

「この世界の半分を将来継ぐことになる人」とは、もちろんカールのことである。たしかにイザベラはカールに惹かれており、愛する人の子を産むということはイザベラ自身の喜びであるとも考えられる。しかし一族を導くためにイザベラ自身ではなく、カールとの子が必要であるというブラーカの主張は、イザベラ自身の選択の余地を奪っているように思われる。ここではイザベラ自身が望むと望まないにかかわらず、子を産む性としての女性の役割がイザベラに与えられ、これを遂行するよう期待されている。つまりこうしたブラーカの要求からは女性性を生物学へと還元する姿勢が透けてみえるのである。

イザベラが産む性としての女性の代弁者だとすると、カールは反対にこうした女性性を搾取する側にいる。語り手は、カールがイザベラと愛し合った夜のことを次のように語る。

彼の内部にあったのは愛だけではなかつた。復讐したいという願いがあつた。なぜなら自分が欺かれていると信じ込んでいたからで、彼はそれだけいっそう荒々しく手っ取り早く彼女を自らの情欲の生贄にしたのである。(524)

イザベラはここではカールの情欲の犠牲者である。またカールは女ゴーレムも、愛のためではなく「常習的な官能」のために求めるのである。つまり、カールによって代弁される父権的な

男性らしさのもとで、女性の性は搾取される運命にあるのである。

こうした生殖と搾取との図式は、より広い視野に立って眺めると自然と文化という二項対立の一要素であることが分かる。次にイザベラとカールとの社会的な役割分担に考察を加えたい。カールは社会的ポストを手に入れると同時に、人が変わったように「高慢、肉欲、吝嗇」に目覚める。史実における大公カールは、1519年に19歳の若さで神聖ローマ皇帝に即位すると、強大な兵を率いて帝国の領土を次から次へと拡大させた偉大な統率者である。しかしこの物語においてカールがイザベラと初めて出会うのは、カールがまだ皇帝に即位しておらず、政治的な立ち位置が不安定なときである。その中で語り手が語るカールは人間離れした絶対的な権力者ではなく、金銭欲や肉欲に駆り立てられながらもイザベラとの純粋な恋に葛藤する青年である。カールは初めてイザベラと語り合った夏の夜、イザベラに向かって「あなたのためならお金を用意しますよ。私の将来の帝国を質に入れるとしても」(514)と約束する。しかし、実際にローマ皇帝の地位に就くことが決まったカールは、イザベラとの関係に迷いが生じる。

決着のつかない願望が彼の心を二分していた。愛にいくら払うのか、自らの地位にいくら払うのか、エジプトの王女と結婚していいものか、それは自らの王位を揺るがせにはしないか。(538)

カールに与えられた社会的ポストは、彼の本性にはなかった権力を彼に付与し、より組織的で戦略的な政治の世界に彼を組み込んでいく。

それならば、社会的ポストを手に入れる前のカールの無私精神は、何も持たない自然な状態とみなすことができる。こうした自然状態をイザベラは代弁している。イザベラは「貧しいことの素晴らしさ」(548)を知っていると語られている。また先にも触れたようにイザベラは、物語の初めから最後まで「罪のない」人物として設定されていた。そもそもジプシーであるイザベラは、財産を所有するという観念も習慣も持ち合わせておらず、食事すら川に落ちた林檎ですませるほどに物質的な欲望や貨幣経済とは無縁な存在である。

イザベラに対してカールは自然状態を維持することができない。とりわけ女ゴーレムやアラウンといった自然ではない存在について知ったとき、カールは自らを特別な存在として認識し、イザベラから離れていく。

大公はふだんの理屈の通るあたりまえの世界から、悦楽と神秘的な力とからなる不思議な世界に一夜にして引きずり込まれ、真摯な深い物思いにふけた。彼は内面的に星がひとつ空に引っ張り上げられたかのように、世間の人びとの上に立っていた。これまでは彼らと漫然と暮らしていたのに。そして、これからの自分の一挙手一投足がすべて重要な意味

を持つのではないかと思うようになった。(513)

これはアルラウンの出生の秘密を知ったときにカールが抱いた印象である。アルラウンという不思議な存在はカールを世間から遠ざけ「空に引っ張り上げ」ることで、将来カールが手にする権力者としての地位をカールに予感させる。さらに、物語の終盤、次期皇帝になることが明らかになってくるとカールはとたんに「ゴーレムへの抗いがたい情欲」(528)を抱くようになる。

それは予想だにしない性質の衝動であったが、彼はそれを否定することも拒否することもできなかった。この感情が何か確かなもの、何かありうべきものを必要としているということさえ否定できなかった。一方でひょっとしたらその感情は無限の彼方へと夢のように咲き切ってしまうのではないかということも否定できなかった。このように心が分裂した状態では、かの高き喜びのうちの実体なきもの、ぼんやりしたものが、この官能的な性の勝利に比べれば空虚で卑しむべきもののように思われた。(528f)

ここで「かの高き喜びのうちの実体なきもの、ぼんやりしたもの」とは、イザベラと愛し合ったときに感じた幸福感を指している。権力を手にしつつあるカールが、イザベラではなく女ゴーレムに惹かれる理由は次の引用にある。カールは女ゴーレムとの別れ際に次のようなことを言っている。

「じゃあ明日の晩また来るよ。明後日も、毎晩でも、いや昼間だって、僕が強大な一族の支配者となって自由になったらね。その人たちにも僕たちのように生活の愚かさを喜ばしい楽しみで忘れさせてあげよう！」(535)

「生活の愚かさ」とは何か。「強大な一族の支配者」として「空に引っ張り上げられたかのよう」に世間をみる彼の視線は、世界地図を眺める視線である。こうした視点に立つカールは、貧しさがもたらすような不安、つまりその日の食料に窮したり、雨風をしのぐ屋根を探したりといった不安とは無縁である。彼の不安は、持っている財宝がなくなっていないか、王位に揺るぎはないかということに尽きる。カールが「生活の愚かさ」と呼んでいるものは、保障のない生活のこまごまとしたことであるのだ。そうした保障といったものは放浪の民であるイザベラにとっては桎梏でしかなかった。

社会的ポストがカールに与えた権力は、ここでもまた階層的な二項対立を作り出している。一方には社会組織に縛られないイザベラがおり、他方には君主制という組織に属するカールが

いる。このようなイザベラの自然な状態と差異化して、カールを文化の代弁者とみなすことは可能であろう。ここからカールとイザベラとが、文化と自然という二項対立の図式を作り出していることが分かる。ここまで明らかにしたことは、イザベラによって自然と生殖とが表象され、カールによって文化と性的搾取とが表象されているという男女の二項対立であった。そしてこの二項対立は、父権制の階層的な図式のもと上と下とに配置されるのである。

3. 境界に立つ女ゴーレム

冒頭で予告したように、女ゴーレムはこのような父権制のもとに形成されたジェンダーに攪乱をもたらす。それは、彼女の内に秘められた制御不能性のモチーフによる。たしかに女ゴーレムを製造したユダヤ人は、ゴーレムを製造したことで不幸が起こるだろうことを警告していた。

伝説のゴーレムは、肉体が大きくなりすぎたために製造者を押しつぶしてしまったが、女ゴーレムは伝説のゴーレムとは異なり肉体的な強大さは備えていない。彼女が備えているのは、美しいイザベラから受け継いだその似姿である。しかも彼女は本物のイザベラよりも美しく飾り立てることによって、イザベラの地位を完全に乗っ取ることに成功する。カールもアルラウンも、イザベラではなく女ゴーレムに恋をするのである。こうした事態はカールの意図に反している。カールは、アルラウンを欺き排除するために、女ゴーレムを作らせたはずであった。それがカール自身が女ゴーレムの虜になってしまうのである。現にカールは女ゴーレムを偽物だと見抜くことができない。

ゴーレムのペラは何につけても自然に答えたので、彼は彼女がまさか人形であるとは疑いもしなかった。それに、彼は自らの鋭い目を欺くほどの知覚の錯覚を起こさせる技術などありえないと思い込んでいたのである。(523f)

ここでカールが自らの目を欺くほどの技術などありはしないと考えていることに注目したい。カールは自らの目に全幅の信頼を置いているのだ。目に対する信頼はカールにのみみられることではなくイザベラにもみられる。それは、アルラウンが眼鏡をかけて（つまり学者ぶって）世間に対して考えられる限りの罵声を浴びせている場面にあらわれている。

そこで彼女はつい声をあげて泣いてしまった。そしてもはや目を上げることができなかった。なぜなら目こそ人間に関わるもののうちで最も信頼のおけるものだからである。もし、自然の衰えが、愛する人と私たちとの間に、そのような硬く冷淡に濁ったガラスを必要とするならば、それはおそらく絶望的なことではないだろうか。ふだんは空気と光の中に喜

びを求める知覚が、今や大地の固い力の助けを必要とする様をみななければならないとしたら、このことは眼光鋭い人にめまいを起こさせることだろう。その助けが知覚の低下ないしは破壊をもたらすことは必然である。眼鏡というものは、もっとも恐るべき監獄であり、そこからみると世界全体は変わってしまったようにみえるのだ。ただ慣れてしまえば、レンズを通して現れるこの世界を前にした驚愕も消えてしまうものだ。(473f.)

ここでは、眼鏡が「最も恐るべき監獄」として拒否され、裸眼で見たものこそ本当のものの姿として賞讃される。こうした目に対する信頼は、結果として、本来ならば知覚を強化するはずの眼鏡という科学技術を逆に怪しいものへと貶める。なるほどたしかに、イザベラとカールは、アルラウンや女ゴーレムといった科学では説明のつかない不思議な存在に取り囲まれているのであるから、それに比べれば科学技術など劣ったものであるかもしれない。ここにイザベラとカールに共通点を見出すことができる。それは、どちらも女ゴーレムに抵抗する術を持っていないという点である。つまり、彼らの油断が女ゴーレムの制御不能を招いたといえる。

女ゴーレムは、イザベラの似姿でカールを惑わすことで、イザベラの一途な愛に疑問符を突き付ける。そして、女ゴーレムはカールによる性的搾取の意味も自分の都合の良ようにすり替える。女ゴーレムにとって、アルラウンと結婚しているながら、カールと関係を持つことは罪ではない。女ゴーレムが提示するのは愛の多様性であり、彼女は生殖という生物学的な女性らしさに縛られることがないのである。また女ゴーレムは、イザベラのような清貧に甘んじず、アルラウンやカールが好むように着飾っているにもかかわらず、二人とも女ゴーレムが偽物であることに気が付かない。そのうえ女ゴーレムは「約束した真珠、忘れないでね。」(535) とカールに宝石をねだる。それでもカールは、女ゴーレムがイザベラではないことに疑問を抱かないのである。カールにとって自然と文化の二項対立は非常に曖昧なものであるのだ。

おわりに——攪乱する女ゴーレム

以上にみてきたように、生殖／自然と性的搾取／文化という階層化された社会の諸概念に、イザベラの模造品である女ゴーレムを投入すると、そうした諸概念の二項対立は、父権的な秩序のもとに、平和的に上下の関係を結んでいることが分かる。こうした平和な秩序を攪乱するのが女ゴーレムなのである。攪乱の化学反応は、女ゴーレムとイザベラが対峙したときに起こる。カールは、「知覚の錯覚」が起きることをもっとも恐れていた。つまりカールは、女ゴーレムを本物のイザベラだと信じていたのである。それゆえに女ゴーレムに欺かれていたことが明らかになると、猛然と女ゴーレムに怒りをぶつけるのである。しかしそれは、カールが代弁する父権的な秩序の中に、女ゴーレムと本物のイザベラとの混同を許す余地があったことへの怒りでもある。こうした女ゴーレムが教えてくれることは、カールが父権制の絶対的な権化では

なく、アイデンティティの揺らぎを抱えた人間であるということである。カールのアイデンティティは明確な性差によって規定できるものではないのだ。とはいえ、女ゴーレムが提示するような愛の多様性は、もちろんキリスト教的な秩序において許されるものではない。それゆえに、カールは女ゴーレムの誘惑から逃れるために「聖者」(552) にならなければならない。この物語において女ゴーレムにはネガティブな評価が与えられているといえる。このようにして女ゴーレムは、人類最初の女がアダムにすでに内包されていたように、父権制の内側からその秩序を攪乱するのである。

„Die“ Golem auf der Grenze — Gender Studie zu Achim von Arnims *Isabella von Ägypten* —

NAKAOKA Shoko

Als die Golem-Sage, deren Entstehung mit dem biblischen Bericht der Erschaffung Adams zusammenhängt, durch Jakob Grimm unter den deutschen Romantikern bekannt gemacht wurde, war „Golem“ ein männliches Hauptwort. Achim von Arnim hingegen hat das Wort in seiner Erzählung *Isabella von Ägypten, Kaiser Karl des Fünften erste Jugendliebe* (1812) auch als Femininum benutzt. Zwar setzt sich Arnim anhand von Grimms Sage mit dem Golemstoff auseinander, doch seine Golem spielt eine andere Rolle als die Sagenfigur. Während der Golem der Sage ein stummer Diener ist, der am Ende seinen Schöpfer mit seiner übermenschlichen Kraft überwältigt, wird die Golem in Arnims Erzählung zu einer schönen Verführerin.

Die bisherigen Untersuchungen über diese Erzählung gehen kaum auf die Frage ein, warum der Golem (Adam) bei Arnim ein anderes Geschlecht erhält. Nach Auskunft der Bibel wurde die erste Frau nicht wie der Mann aus Erde geschaffen, sondern aus einer Rippe Adams. Dies könnte man so verstehen, dass Eva bereits bei seiner Erschaffung in Adam enthalten war, sozusagen von Gott in ihn eingebettet wurde. Es ist daher nicht ganz abwegig anzunehmen, dass der Golem, das Abbild Adams, ebenfalls weibliche Aspekte in sich birgt. Demnach läge bei dem/der Golem keine klare Grenzziehung zwischen den dichotomischen Kategorien Männlichkeit und Weiblichkeit vor, sondern es käme gerade ihre Zweideutigkeit ans Licht. Auf der Grenze zwischen den beiden Kategorien stört die Golem Arnims die patriarchalische Ordnung der „weißen“ westlichen Kultur.

Der Erzähler in *Isabella von Ägypten* berichtet die Handlung und erklärt ihre Bedeutung, die die Figuren selbst gar nicht erkennen. Er spricht nicht nur über die Ereignisse, die Figuren und ihre Motive, sondern auch über seine eigenen Erfahrungen. Es ist klar, dass der Erzähler ein Zeitgenosse der Leser sein soll, weil er sie mit „euch“ anredet. Er erzählt ihnen zwar von Isabella, aber bringt auch sich selbst ins Spiel. Da er über „unsere deutsche Muttersprache“ redet, sind seine intendierten Leser deutschsprachig. Zudem erheischt er wohl

ihre Sympathie, indem er sich mit der Formulierung „uns Weintrinkern“ in ihre Zahl einreihet.

Der Erzähler hebt hervor, dass die Golem von ihrem jüdischen Schöpfer die drei Laster Hochmut, Wollust und Geiz ererbt habe. Doch können wir seiner Aussage nicht blind vertrauen, weil der Jude, der sie hergestellt hat, die Herkunft dieser Laster anders begründet: Nach Meinung der Juden stammen ihre Eigenschaften aus der Qualität des Leims. Der Jude sagt, die Menschen seien um so viel schlechter, wie der Leim dieser Welt im Vergleich zum Leim des Paradieses. Somit hängen also die Identität der Golem und ihr Geschlecht von der Qualität des anorganischen Leimes ab.

Hierin kommt eine patriarchalische Einstellung zum Ausdruck. So wie Karl der Herr der Golem ist, bezeichnet sich der Erzähler als der Schöpfer von Isabella, wenn er am Schluss der Erzählung sagt, er habe sie „schuldlos“ „erfunden“. In beiden Fällen stehen die Kategorien von Weiblichkeit und Männlichkeit unter dem Einfluss eines patriarchalischen Weltbilds.

Einerseits repräsentiert Isabella die Weiblichkeit. Der Erzähler schätzt ihre Liebe hoch, weil sie trotz ihrer Verschmähung nicht untergegangen sei. Isabella soll dem Erzherzog Karl ein Kind gebären und ihr Volk nach Ägypten zurückführen. Warum kann sie aber nicht ohne ihr Kind zur Führerin werden? Ihr Geschlecht scheint auf das biologische Gebiet der Sexualität reduziert. Andererseits beutet Karl ihre weibliche Sexualität aus. Während er als späterer Kaiser dem Bereich der Kultur angehört, repräsentiert die zigeunerische Isabella den Bereich der Natur.

Die Golem dagegen kann mit keinem der beiden Bereiche identifiziert werden. Zwar ist sie das Ebenbild von Isabella, aber nicht „schuldlos“. Karl verfällt der prächtigeren Golem, die er für Isabella hält, und erkennt ihre Falschheit nicht, „da er die täuschende Kunst der Sinne für unfähig achtete, sein scharfes Auge zu täuschen“. Auf der anderen Seite vertraut Isabella dem sinnlichen Augenschein. Beide aber lassen sich von der Golem betrügen, die weder durch biologische Weiblichkeit noch durch patriarchalisch-soziale Männlichkeit bestimmt ist und erfasst werden kann.

Die Rolle, welche die Golem spielt, macht deutlich, dass in der Erzählung Weiblichkeit und Männlichkeit in einer hierarchisch-patriarchalischen Sozialstruktur friedlich koexistieren sollen. Solange Karl ein Verhältnis mit der diese Struktur gefährdenden Golem hat, ist er ein Leidender. Nachdem er sich dann von ihrem destruktiven Zauber befreit hat, wird er zu einem „Heiligen“. Kraft ihrer zweideutigen Identität verwirrt die Golem die patriarchalische Weltanschauung, so wie es schon in der Geschichte von Eva und Adam angelegt ist.